

2019年度 政策提言ツアー 実施報告書

実施日：2020年2月21日(金)

意見交換：財務省(主計局)、国土交通省、総務省、内閣府+環境省

参加者：赤井ゼミ¹学生12名、引率教員1名(赤井)



¹ 連絡先：赤井伸郎（大阪大学国際公共政策研究科教授）akai@osipp.osaka-u.ac.jp

目次

1. 政策提言ツアー企画の経緯.....	2
2. スケジュール.....	3
3. 写真.....	4
3. 学生コメント.....	6
3.1 財務省.....	6
3.2 特別視察：総務省行政管理局 新しい職場環境視察をしてみても.....	8
3.3 国土交通省住宅局総務課@国交省.....	10
3.4 総務省自治行政局公務員部公務員課女性活躍・人材活用推進室.....	12
3.5 環境省環境再生・資源循環局 廃棄物適正処理推進課・内閣府民間資金等活用事業推進室.....	14
5. 政策提言ツアー実施の効果：企画者のコメント.....	18

1. 政策提言ツアー企画の経緯

大阪大学法学部国際公共政策学科赤井ゼミ所属の学生が2019年度に執筆した論文が、ISFJ（日本政策学生会議）において、最優秀政策提言賞を受賞した。論文において提言した政策に関して、実際に、その政策を所管する省庁に訪問し、提言を行うこととした。受賞した論文およびその他の班の論文は、総務省、国土交通省、環境省、内閣府（PFI推進室）の政策にかかわるものであり、その政策担当者と議論する機会を持つことにした。本ツアーに御協力いただいた多くの皆様には、学生に貴重な体験の機会を与えていただいたことに、深く感謝したい。

2. スケジュール

午前パート

9:20 財務省正門前に集合（9:05 に大阪大（東京オフィス）に集合、荷物を預ける）

<時間配分：挨拶 5 分+発表 15 分+質疑 15 分>

9:30-10:05 プレゼン テーマ①「公営住宅の効率的な配分ーより多くの人々が「住む」に困らない社会を目指して」

10:10-10:45 プレゼン テーマ②「廃棄物処理施設の効率的な運営に向けて -民間委託と広域化に関する一考-」

10:50-11:25 プレゼン テーマ③「市町村における男女共同参画社会の実現ー女性地方公務員の活躍を目指して」

11:30-12:15 調査課長との意見交換（ランチを食べつつ）@財務省食堂

午後パート

午後各省庁訪問（<時間配分：挨拶 5 分+発表 20 分+質疑 20 分+予備 15 分>）

13:30-14:30 省庁訪問：国土交通省住宅局総務課@国交省

政策提言：「公営住宅の効率的な配分」

14:45-15:45 省庁訪問：総務省自治行政局公務員部公務員課女性活躍・人材活用推進室@総務省

政策提言「市町村における男女共同参画社会の実現～女性地方公務員の活躍を目指して～」

16:15-17:15 省庁訪問：環境省環境再生・資源循環局 廃棄物適正処理推進課 および 内閣府 民間資金等活用事業推進室@内閣府

政策提言「廃棄物処理施設の効率的な運営に向けてー民間委託と広域化に関する一考ー」

18:30～ 懇親会(霞ヶ関で活躍する大阪大学出身の皆さまとともに)：

3. 写真

財務省訪問〔午前〕と意見交換

国土交通係



内閣係・環境係



総務係



各省庁との意見交換会(午後)

国交省住宅



総務省自治行政局



環境省・内閣府



3. 学生コメント

3.1 財務省

財務省への政策提言での発表・議論（自分の班および、他の班）から感じたこと、学んだこと：発表・議論で得られたもの（データで見る政策と、現場で見る政策など）、財務省のハードの印象・財務省のソフトの印象（担当者）など

"

1. 財務省の方に対しては国が補助金を出すというような内容の政策提言は、かなりの説得性を持たせないと受け入れてもらえないと感じた。また、受益と負担の話では、財務省の方々が普段どのような考え方のもとで査定を行っておられるか知ることができ、大変勉強になった。全体として、論文のテーマや提言の内容にかかわらず、常にお金の流れについては気にされるので、政策提言の実現可能性では、もう少し財源についての議論もできたらよいのではないかと思った。
2. 廃棄物処理施設の発表の際、担当者の方が独自の資料を用いて説明して下さった内容にとっても興味を持ちました。論文執筆時に調査・議論した内容もありましたが、同じ論点でも違う発想で話して下さい、面白かったです。お忙しい中資料を用意して下さい、大変ありがたいと感じました。財務省に行くのは3回目ですが、今回はこれまでと違う部屋を用意していただき新鮮味がありました。
3. 論文を書いていると、無意識にも WEST や ISFJ の大会を意識した政策提言になってしまう。また、自分たちが立案した政策の実現可能性について議論し、論文中にその内容を入れられたとしても、それは机上の空論で、実際現場での各省庁の連携、政策コストを考えると実現が難しかったりするものも多くあると感じた。論文におけるデータに基づいた政策を、現場で実現可能な政策のレベルまで引き上げるには、政策提言を考える際に何を気を付けたらいいか、何が足りないかを知るにはこの政策提言ツアーへの参加が不可欠だと感じた。
4. 私たちの班は公営住宅政策に関する提言を行ったが、財務省の担当者の方に予想以上に評価していただいて少し驚いた。数字のパズルでしかない等の批判覚悟だったからだ。しかしデータに基づいた結果を真摯に受け止めて下さり、その上で我々の分析の限界等も指摘してくださって、議論が深まったと同時に、このような計量分析が官庁においても評価されつつあることを実感した。また実現可能性に関しては、現場からの厳しい意見や法改正の手続きの必要性を指摘してくださり、自分たちが失念していた部分に気づくことができた。

5. 財務省の方に「相手の制度に乗ったうえで、一部だけ変えたら効果を得られる」という方式で政策提言を考えたことを褒めていただくことができ、大変嬉しかった。また財務省がミクロの政策だけでなくマクロの政策の理解を得るために、政治家とたくさんの交渉を重ねたり、国民に周知するための取り組みを必死で行ったりしている様子をお話していただけたのが興味深かった。
6. 自分たちが必死に取り組んだ研究の成果や発表を真剣に聞いていただき、とても前向きな評価・コメントをしていただけて、論文大会で賞を取ったとき以上に、本当に嬉しかったです。特に、「相手の土台に乗った上で、根拠（ファクト）を踏まえて一緒にゴールへ向かっている」点と、「小さなアイデア（提言）をたくさん出すのではなく、深く考え抜いたアイデア（提言）をしっかりとぶつけている」点を評価していただいたことが印象に残っています。また、提言ツアーの前に、財務省の方々が論文や提言内容を担当省庁の職員と議論した旨のコメントをお聞きし、担当者の方々に自分たちの提言が実際に届いていることを実感できたことも非常に嬉しかったです。
7. 私の班の政策提言の財務的事情に関しては議論はあまり交わさなかったが、他班の発表も踏まえると、エビデンスベースの政策立案が現場でも希求されているのだということ議論の各所で感じ取れた。また、財務省の方々が再三おっしゃっていたように、政策実施主体に国を据えるのかそれとも都道府県や市町村レベルで取り組むべきなのか、という観点をもっと政策立案段階で吟味すべきだという点には共感でき、来年以降の論文執筆の詰めに役立つと考えた。加えて、発表を聞いてくださった財務省の皆さんが、発表及び感想を述べていただいている際に真摯に受け止め目を合わせる・あいづちを打つなどの反応を示してくださっていたので、とても好意的にこの機会を受け止めていただいているようで嬉しく感じた。
8. 約半年かけて執筆した論文を、財務省の方の前でプレゼンさせていただき、意見交換をできたことはとても貴重な経験となりました。実際に女性公務員として霞ヶ関で活躍されている方のお話は、自分が今後どういうキャリアを描いていくかという観点でも、とても参考になるものでした。また、学生の論文をうけて資料を用意して、持論を展開してくださった方もいて、その真剣さや姿勢がかっこいいと思いました。そこまで考えられていたとしても、現状を理想的な状態に変えていくことは難しいということを知りました。財務省の視点というのは、論文執筆の過程で往々にして抜けてしまう視点であると思うので、来年度後輩をサポートする立場になったときに意識的にそういう視点をもてるようにしたいと思います。
9. 赤井ゼミは政策提言で法律や現行制度の改正を挙げ、その実現可能性は高いと提言することも多いが、実際に省庁は簡単に改正を行わないこと。財務省が査定して、そのことを各省庁に対して提言してもあまり政策は変わらないということもあるということを知り、効率よく政策を実行できるのに各省庁は対応できない理由についても考える

必要性を感じた。去年の印象では財務省はレトロな庁舎のイメージだったが、綺麗で威厳のある会議室があることに驚かされた。

10. 最初はお金の出入りを管理している部署という印象を勝手に抱いていた。しかし、「受益と負担」の話を聞いて、そのお金で何が行われどのような成果が生まれるのかという政策的・費用対効果的な考えが一番必要になる仕事なのではないかと考えを改めた。お金を管理するということは、額面の数値を合わせるだけでなく、それにより生み出される付加価値まで想定して行わなければならないと考えると、すべての部署との関わりを持つ総合的な仕事であると認識した。
11. これまでの「論文の良し悪し」や、大阪府での提言ツアーのような「現場の声」とはまた違った「国の財務」という視点からご指摘・ご質問いただけたのがとても新鮮だった。初めての政策提言ツアーだったので、こういう点に財務省の方は気づかれるんだなという新たな考え方を学ぶことができ、来年の論文はこういった視点は忘れずに取り組んでいきたいと思った。財務省の建物は非常に歴史を感じる重厚感があるものだったので、発表の際は非常に緊張してしまっただが、職員のみなさんが非常にお忙しい中真剣に聞いてくださったり、あらかじめ準備してきてくださったりしている姿を見て、一生懸命頑張ることができた。国の中枢を担う優秀な方々だからこそ、自然と学生に視線を合わせるようなことができるのかなと思い、とても尊敬の念を抱いた。
12. 自分の班の発表について。私たちの班が発表した時にフィードバックしてくださった担当者が、以前ごみ処理施設の問題に関わったことがある方で、その時の資料を用いながら詳しくお話してくださったのが印象に残っている。なかなか現場の声を聴ける機会は少ないが、政策を考える上で現場での実行可能性は大事だと再認識させられた。来年自分が論文を書く際にも意識しておこうと思った。

3.2 特別視察：総務省行政管理局 新しい職場環境視察をしてみよう

1. 官公庁の職場は、狭くて暗いイメージを持っていたが、民間の職場改善に取り組んでいる企業のような窮屈さを感じない職場になっており、新鮮だった。是非、霞が関全体の職場環境の改善につなげて行ってほしい。
2. 働き方改革がいろいろなところで進められているということを実感しました。赤井ゼミの先輩が関わられたと聞き、先輩方のお仕事を直接見る機会があまりないので、貴重な機会となりました。
3. 各企業が職場環境を改革していることは知っていたが、霞が関でもそのような取り組みが行われているとは知らず驚きだった。改革前と改革後で職員の方々の意識や働きやすさがどのように変化したのか知りたかった。

4. デスクの配置は今まで訪問した官庁の雰囲気とは全く異なる印象を受けた。しかしながら職員の方々の雰囲気からは働き方の変化があまりないように感じた。デスクの配置を工夫することにより職場の風通しを良くしようとするものであるが、以前と変わらず静かな職場だなという印象を受け、本当に働き方が効率化されたのか少し疑問に感じた。
5. 確かに民間企業では目新しいものではないが、インターンなどで官庁を見させていただいた中では、他のオフィスとは異なった形であったと思う。阪大図書館のグローバルcommonsでよく使用しているディスプレイがあり、同じような空間があったことが面白かった。
6. 正直、驚きました。官公庁の職場に対して、机をぎっしり並べたお堅いイメージを持っていたので、開放的な会議スペース／休憩スペースや、机を自由に移動させていくつかの「島」を作っていた様子を見て、官公庁の働き方改革が進んでいることを実感しました。
7. 比較的ベンチャー企業や外資系などで進んでおり、省庁等従来の形式を重んじている印象を抱きやすい場において、拝見させていただいたとおりの職場内序列に縛られすぎない柔軟なオフィススタイルが採用されているのは今後の他省庁においても大いに生かされて欲しいと思わせる事例であった。
8. お堅い職場に思える官庁においても、働き方や職場の改革がなされていることを目にすることができました。総務省は、働き方改革の旗振り役でもあり、発信するだけでなく自ら実践する姿勢はすごくいいと思いました。
9. 霞が関の中央官庁では新しい職場環境という言葉には無縁だろうというイメージを持っていたが、思っていた以上に先進的で最近の民間企業とあまり変わらないと思った。こういう職場の雰囲気が広まっていけばいいと感じた。
10. 従来の職場についてみたことがなかったので、比較ができなかった。改革前の職場について、事前知識を入れておくべきだった。それを踏まえたうえでの感想として、大学のミーティングルームのように、移動しやすく議論もしやすいフラットな職場だと思った。ただし、個人作業している人にとっては議論している話し声がうるさいのではないかと思うので、個人の仕事場と議論の場をもう少し厳密に区切ってもいいのではと思った。
11. 各省庁の職場内のイメージがすごく変わった。そもそも、職場環境を改善しようという動きがあるんだという新しい発見ができたと共に、これが全ての省庁に広がって、外にもPRできれば、国民の抱くイメージも変わるのではないかと思った。この改善を行ったことによってもたらされた変化は何かあるのか気になった。
12. 省庁に抱く私のイメージは昔ながらの堅いものだったが、それがいい意味で裏切られた。自由な形で並べられた机とか、SNS で職場の様子を発信しようとしている取り組みは民間と似ていると感じた。以前ほど省庁との距離を感じなくなった。

3.3 国土交通省住宅局総務課@国交省

国土交通省住宅局への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと、学んだこと：発表・議論で得られたもの(データで見る政策と、現場で見る政策など)、国交省ビルのハードおよびソフトの印象(担当者)など(「自分で発表してみても」および「他班の発表を聞いて」の視点で)

"

1. 実務家の視点から利回り等の具体的な数値の正当性など、政策提言の具体的な中身についてのご指摘が多かったことが印象的だった。また、現行の公営住宅法をどのように改正したらよいか、といった財務省の方とは異なる、より実際の政策立案過程に近いご指摘や、地方公共団体の裁量が増えると訴訟リスクが増えるといった、執筆段階では目が行き届かないような、実際の政策担当者らしい意見も聞くことができとても勉強になった。
2. 担当者の方々が、数字の正当性や現行法との関係について最も気にされているように感じ、実際に政策立案をするうえでの視点を学ぶことができました。また、もし現行法を改正する場合に障壁となることを説明していただけたのも面白かったです。発表で使用させていただいた部屋は、直前に訪問した総務省行政管理局とは違い、従来通りのオフィスの印象でした。2つの部屋がとても対照的だったので印象に残りました。
3. 今回は後輩の発表に付き添う形での参加になったが、まず驚いたのは現場の住宅分野専門の方からの質問に的確に返答できていたこと、担当の方々が、学生に対しても政策立案者と対等の立場で意見を求めて下さっていたことだった。実際に提言した政策を実現するには、法改正や、より緻密な数値の計算、政策コストの議論が必要であると知ることができたが、その議論まで持って行ける政策を提言できていたという意味で素晴らしいと実感した。
4. 実際に公営住宅行政に携わる職員さんに対するプレゼンということで、気を引き締めてプレゼンに臨んだ。やはりその道のプロの方々なだけあって、今までのフィードバック以上に細かい内容にまで議論が及んだように思う。特に昨年一番力を入れて論文執筆に取り組んだ3年生が生き生きと議論に励んでいるのを見て、喜ばしい気持ちになった。また執筆過程では明らかにできなかった、固定資産税評価額に関する疑問を解消できたことも良かった。
5. 法律をどのように改正するのかという踏み込んだ質問までいただけたことが、自分たちの提言を真剣に検討していただけていると感じて、嬉しかった。また執筆を進めるう

えでよく話にあがっていた、「国交省は公営住宅に加え民間の住宅セーフティネットを推進したい」という認識が、間違っていないことも確認することができた。

6. 財務省の方々と同様に、学生が必死に取り組んだ研究の成果や発表に対して、真剣な表情で耳を傾けてくださる姿に触れ、本当に嬉しかった。また、事前に論文やスライドを見ていただいていたようで、発表内容の細かいところにまで、実務家の観点から質問・コメントをいただけたので、ここまで研究を進めてきた身として非常に有意義な時間となった。ありがとうございました。
7. 国交省を訪れるのは、昨年の提言ツアー以来であったがやはり何度来訪してもそのオフィスの内観の第一印象は綺麗だと感じた。住宅局の部屋の一角を使わせていただき発表したが、他の2班の発表時と比べ担当者と発表者間の距離が近く、率直な意見や感想・議論の活発化が見られた。財務省でも見解を尋ねられていたが、制度変更後の数字の妥当性に関しては、学術的には妥当のように思えても現場レベルの時点からすれば訴訟リスクをはらんだ事項ともなり得るというお話を聞き、やはり実際の制度変更はどのようなフェーズで行われるものなのかお話を伺いしてみたいと感じた。
8. 学生の発表に対して、真摯に向き合い深いところまで議論している姿がとても印象的でした。一学生の意見と受け止めずに、法律改正などの深いところまで話をしてくださるのは、やはり時間をかけて論文執筆に取り組んだからこそであると実感しました。論文を書いていると、どうしても目に見えている課題だけに着目してしまいましたが、制度変更やそれによる利害等も頭の片隅において議論を進めていくことができればと思います。
9. 現場を経験した職員さんはその分野について特に専門性が高いので、一つ一つの意見に鋭さがあった。縦割りの強いイメージがある行政の側から省庁横断的にやっていけないものかというコメントが出たのが意外に思えた。フィードバックを聞いて、「今の制度がよくない」と発表の中であれば、それが当然という風に考えてしまうが、そもそもなぜ今そのような制度をとることになってしまったのか、どういう正当性があるのかなど現行制度の決定根拠を疑うことから始めるべきなのだと思った。
10. 官僚の方々には、数字に対する根拠を求める姿勢が強いと思った。家賃算定式の数字・割合1つにしても、なぜその数字なのか、それによってどのくらいの影響が出るのか、詰問している姿を見て、役人としての説明責任を果たすためには何事にも明確な根拠が必要なのだと考えた。全員にEBPMの考えが根底に浸透しているように感じた。
11. 実際に執筆した論文の提言先で、政策担当者に発表をすること自体に非常に意義を感じる事ができた。ヒアリングでも国土交通省の方からお話を伺ってはいたが、政策提言まで完成して初めて意見を伺うことができ、どういったところが有効なのか、逆に厳しいところ（法改正という限界など）なのかをはっきりと教えていただけて、ここまででやっと、本当の政策提言論文の完成なのかなと感じた。やはり、大阪府の方に聞いたときと、国交省の方に聞いたときとは、違う視点から見ることによって生まれ

る差を感じ、どちらにとっても有効な政策を提言することの難しさを実感できたし、そこにチャレンジしていきたいとも思った。こちらでも財務省同様、学生の研究を真剣に検討してくださっている姿を見ることができて、新たな論文執筆のインセンティブを得ることができた。

12. 公営住宅の班の提言した政策は一番現場の政策感とあっている気がして、議論が深まっている印象を受けた。少し質問からそれてしまうが、個人的には発表が行われた部屋にさまざまな資料が置いてあることが気になって見ていたが、国土交通省も扱う分野が多様なんだなという風を感じた。面白そうな話題もあり、興味を持てたことも住宅局での提言ツアーの収穫かなと思う。

3.4 総務省自治行政局公務員部公務員課女性活躍・人材活用推進室

総務省自治行政局公務員課への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと、学んだこと：発表・議論で得られたもの(データで見る政策と、現場で見る政策など)、総務省ビルのハードおよびソフトの印象(担当者)など(「自分で発表してみても」または「他班の発表を聞いて」の視点で)

1. 財務省や内閣府の方も指摘しておられたが、地方分権のもとで国が地方公共団体に対して何かを義務付けるような政策に対してはかなり神経質になっておられる印象を受けた。赤井ゼミの論文では国が地方公共団体に義務付けるような政策提言がよくあるが、実際の政策の現場では、地方分権の難しさの中でいかに地方公共団体に義務付けることなくやってもらうかという点に苦心していることを知れて良かった。
2. 初期キャリアを充実させることの重要性を指摘され、4月から新社会人となるので、身が引き締まるように感じました。また、最近は男女問わず昇進意欲が低いとおっしゃっていて、働き方改革や女性活躍推進は、制度だけが課題としてあるのでなく、当事者の意思も重要な要素であり、現実世界での運用の難しさを感じました。
3. 家庭を持ちながらキャリアを積まれている女性職員の方のお話を伺うことができ、女性活躍に関する政策を女性社会人という視点で見てもらえたのはよかったと思う。財務省の方のお話でも感じたが、今後は、女性活躍を目指す一方で、それぞれが望む人生に基づいたキャリア選択ができるような社会を目指していかなければならないと感じた。労働人口が減少していく中で、労働力として女性の活躍を捉えるだけでなく、人生における幸福の追求という観点でも捉えていかなければならないと思った。
4. 総務省の方との議論を通して、女性活躍がまだ停滞している原因に、女性自身の価値観も大きく関わっていることを実感した。そもそも出世を目指さない女性も未だに多いということである。個人の価値観に踏み入ることはできないが、制度の問題以前に、女

性のそのような価値観やそれに対する男性の視点も、議論の範疇に入れていかなければならないのだなと感じた。

5. 「女性の活躍を推進すべき」という認識は基本的には共通認識として社会に共有されている一方で、その手法に関しては画一的な方法はなく、特に地方自治体の職員の働き方に対して中央省庁がどのように介入していくかが非常に複雑な問題であると、お話を通じて感じる事ができた。特に一人一人の意識の問題へのアプローチは今後も課題となってくるのだと思う。
6. 担当者の方々のコメントの中で、「まずはモデルケース（事例）を探してみる」という発言が印象的でした。新しく政策提言をしようとする、出てきたアイデアをゼロベースで考えがちですが（もちろんそれ自体悪いことではないですが）、出てきたアイデアに類似したものが実現されている事例を調べて、それと同じ点／違う点を明確にしなが、それらを糸口に物事を考えていくことも非常に重要だと学びました。
7. 第一に、最初にいらっしゃった担当者の皆さんの一部の方が業務上途中退席する必要が生じ、お忙しい中貴重なお時間をいただいて発表させていただいているのだと身が引き締まる思いであった。論文では市町村を中心に提言を行ったので、実施主体が異なることも有り実際に実施した場合の話をお伺いするのは難しい場面であったが、発表を丁寧に受け止め意見をいただくことが出来たのは貴重だった。ご意見をいただいたとおり、女性活躍推進は働き方改革と両輪で進める必要があり、女性の待遇改善だけでなく男性もより家庭や育児に関わりやすい環境整備をすることが平等に共生出来る社会構築に繋がるのだと強く感じた。
8. 提言対象として地方公共団体や市町村を想定した論文だったので、現場の意見としてお話を聞くことはできませんでしたが、同じように課題意識を抱く立場として議論をする機会をいただくことができました。論文を書く上で、現場の課題について意識を向けるばかりで国の視点が欠けていることが多かったように思い、実際に市町村に主体的に取り組んでもらう必要があるときにどうしたらいいのかというところまで考えが至らなかったことに気づかされました。また、同じように女性活躍に取り組む組織であるのにも関わらず、内閣府男女共同参画局と十分に連携がとれていないのではないかと思います。「縦割り行政」という言葉の意味を身をもって知ったような気がしました。
9. 今回は「昇進」に着目していたが、「初期キャリア」の側面も大事ではないかという意見が出て、改めてこのテーマの難しさを感じた。フィードバックで共通して出たキーワードが「若者の昇進意欲」で、職員の方は女性管理職を対象を絞っていた今回の発表を「若者の昇進意欲に応用できないか」と述べていたことから、一回の発表を聞いて発展させた政策を考案しようとしている姿勢に感服した。
10. 働くことを考えたときに、働く環境と個人の両立が一番の議論になると考えた。仕事をする主体である個人と、個人がすむ環境たる職場の相互作用が成果を生み出すと考えるからである。そのように考えると、女性活躍班の論文は職場を中心とした内容である

ために、個人の意思に関する話が足りなかったと思う。だが組織にできることは、個人が変わろうと動き出した時に、それと連動して変われる職場づくりなど、組織体系により、個人の意思が阻害されることを防ぐこと以外にはないのではないだろうか。

11. 職員の方の中には女性の方もいて、地方と国とでは違うものの、実際に女性公務員として感じていることをお聞きすることができてよかった。「職場内での昇進における男女差別という感覚的な認知として広がっているものを可視化することに意義がある」という言葉が非常に印象的で、そういった視点で書く論文も大切だということを学ぶことができた。また、昇進時期へのアプローチだけでなく、「初期キャリア」にもアプローチすることによって、昇進意欲のある女性を育てることができるといってお話をしてくださったことで、同じテーマでも、アプローチの仕方で論文の方向性が全く変わる可能性を実感することができた。
12. 実際に働いている女性職員の方から国家公務員の女性の働き方についての話を聞いたのは興味深かった。国家公務員の管理職登用までのプロセスと地方公務員のそれとは違うが、国家公務員においても女性の職員や管理職が増えることは地方にとって追い風になると思う。総務省ビルは他の省庁に比べて新しい感じがして、雰囲気やそこで働く人たちも私がイメージしていた官僚とは少し違う感じがした。

3.5 環境省環境再生・資源循環局 廃棄物適正処理推進課・内閣府民間資金等活用事

業推進室

環境省環境再生・資源循環局 廃棄物適正処理推進課 および 内閣府 民間資金等活用事業推進室への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと、学んだこと：発表・議論で得られたもの(データで見る政策と、現場で見る政策など)、内閣府 8 号館のハード・ソフトの印象(担当者) など(「自分で発表してみても」または「他班の発表を聞いて」の視点で)

”

1. 自分たちが執筆した論文が、その政策の担当者の方にある程度良い評価をしていただけなのは自信になったし、また特に政策提言について改善の方向性を見出すことができ、大変貴重な経験になった。環境省、内閣府では、国と地方でどこまでやるか、どう分担するかという点を気にされていたのが印象的だった。政策を実施する主体を考えると、教科書的な棲み分けだけに基づくのではなく、具体的な政策提言の性質までしっかりと考慮して政策を行う主体を考える重要性を感じた。
2. 講評の中で、ごみ処理施設を NIMBY から PIMBY (Please in my back yard) にして動脈産業に近づけたい、と仰っていて、政策の担当者の方はそのようなイメージを描いていらっしゃるのと知り斬新に感じました。将来、ごみ処理場に対するイメージが変わるか

もしれないことは興味深いです。財務省・総務省・国交省・内閣府・農水省では職員の方々の雰囲気は少しずつ違い興味深かったです。

3. 内閣府の建物が他の官庁よりも新しい施設だったが印象的だった。また、他の班の時と比べて、一般企業から出向されている方を含め、若い職員の方も議論に参加して下さったことで幅広い意見を頂けたのでありがたかった。民間委託と広域化の議論は実際に環境省でも力を入れて推進されており、それに関する現場の最新のお話を伺うことができ勉強になった。NIMBY 施設のような、モノとカネの流れが普通のモノとは逆の施設を扱うのは課題や障壁が多いことを改めて実感し、今回の赤井ゼミの提言を少しでも参考にして頂けるとありがたいと感じた。
4. フォーマルな会議室で、さらに参事官・審議官の方も参加され、我々のような一大学生の提言を省庁をあげて受け止めていただいたことは非常に嬉しいことであった。広域化の波はゴミ処理事業のみならず、水道事業などあらゆる公共サービスのこれからのキーワードとなっていくと思われるが、それにこぎつける合意形成が、想像以上に大変なのだということを実感した。
5. 広くてきれいな会議室を赤井ゼミのために開けていただいたことに感動した。建物自体も開放的で清潔感があり、働きたいオフィスであると感じた。実際の廃棄物処理施設の扱い方に関しても、様々な立場があり、ケースバイケースの対応が現場では必要になっているということが良く伝わるお話を聞くことができ、廃棄物処理に関して渡邊班ほどは詳しく理解できていない私でも、楽しむことができた。
6. まず、とても広く設備の整った綺麗な場所で、たくさんの方々に発表を聞いていただけたことが印象に残っています。また、環境省と内閣府民間資金等活用事業推進室の両方の方々の視点からコメントをいただくことができ、非常に中身の濃い時間でした。その中でも、特に「大事なのはやはりアウトプット」というコメントが印象に残っていて、政策提言を行う上で、その効果や持続可能性もきちんと考慮して、それを説得的に伝えることが大事であることを再認識しました。
7. 内閣府敷地内には初めて足を踏み入れたが、発表を行った会議室のみならず各部署ごとのオフィス環境も綺麗で整理されているという印象をまず受けた。財務省の方も話しになっていたとおりに公には大きく流布されない、広域化への試みの経緯や国の視点から見た政策の新規性や必要性の有無に関しては、なかなか論文執筆中に知ることは困難であると改めて感じられた。しかしだからこそ、省庁や各地方自治体や民間企業等政策実現に関わる主体に積極的にリサーチを進め、限界は勿論あるもののその証拠・実績に基づいた視点で論文執筆を行うのが、私たち学生に与えられた権利のようにも思われた。このことこそ学びであった。
8. 内閣府を訪れる機会は生涯ないと思っていたので、今回内閣府に行くことができただけでもいい機会になりました。そこで働かれている女性とも多くすれ違うことがあり、思ったよりも女性も多くいるのかなという印象を受けました。また、用意していただい

た部屋も実際に会議が行われるような綺麗な部屋で身が引き締まる思いでした。発表時には、内閣府の方だけでなく、環境省の方も来てくださっており、またその年齢層も幅広くさまざまな視点での意見を聞くことができました。論文を何度も読み、発表を何度も聞いていたはずなのに見落としていた論点もあり、現場の方の意見を聞くことは重要であると思いました。

9. 「根本から少し理解が足りない」という質問が来るのかと心配だったが、我々の論文の内容に基本的に賛同されていたのが驚いた。また、「いい提言」とまでお褒めの言葉をいただいたのはうれしかった。各提言について我々がリサーチした物以上の詳細な情報を補足していただいたので、それぞれの分野について知見が広がり、興味が深まった。しかし、新規性のある提言だと思っていたことが実はもうすでに検討されていたことがあったので今後はそういう点は留意したい。会議室は非常に綺麗で、審議会クラスの部屋を使わせていただいたことはいい思い出になった。
10. 官僚の方々一人一人の質問が鋭かった。先述したが、何事にも明確な根拠を求めるEBPMの考え方が浸透していると思った。また、受益者と負担者の両者の立場から政策を考える視点が身についていると感じた。特に、民間委託などが普及しているごみ処理分野では、市町村・民間・市民と複数の主体の立場を考えた政策が必要であるため、常に政策により、誰のどのような影響が及ぶのかという複数視点の考え方が必要だと結論付けた。
11. 一般廃棄物処理だけでなく、様々な事業に関しても、PPP・PFIが有効であるという認識が広がっているのだということがわかった一方で、国と地方の裁量の問題など、問題もたくさんあってなかなか進まない状況も学ぶことができた。一言に「効率化」といっても、どこをゴールにもっていくのか、財政面だけでなく、安全面にも考慮する必要があることなど、まだまだ検討しなければいけない点があって、論文の奥深さと面白さを感じることができた。内閣府の建物は今までの省庁に抱いていたイメージとは真逆で、現代的なオフィスだったのが驚きだった。これまで見たオフィスより、木材などが使用されていることによって、温かみがあると感じた。また、若い職員の方が多かったのも印象的だった。
12. ここでの提言では環境省や内閣府の方々に加え、民間から出向している方々も多く集まって頂き、より多様な視点を得ることが出来た。ごみ処理施設にまつわる政策の現状や、自分たちの提言した政策の改善点についてフィードバックして頂けて、自分たちのテーマが現場でどのようにとらえられているのかを知ることができた。発表した部屋が今まで発表してきた部屋のどれよりも格式高い感じがして、緊張感を持ちつつも楽しんで発表できた。

4. 今回の政策提言ツアー全体への感想および、実際の政策決定を行う担当者との意見交換の場（中央省庁、地方自治体、その他など）やそのあり方についての意見・希望

1. 同じ政策提言に対しても財務省の方と、省庁の政策担当者の方との考え方の違いを肌で感じられたり、特に政策の実現可能性の面で、普段のゼミでは得られないご意見をいただけたりと、大変有意義な政策提言ツアーとなった。後輩には、この貴重な機会を大切にしてほしい。
2. 毎年このような場を設けていただきありがとうございます。政策を実際に担当されている方とこのように交流できる機会はもう二度とないと思います。とても貴重な経験となりました。
3. 自分が一年間勉強してきた知識と、書き上げた論文は、政策立案の現場ではどの程度のレベルとして評価されるのかを知ることができる機会は本当に貴重だと感じた。論文を書き上げた達成感だけではなく、自分の学生生活をかけてきた論文で官僚の方と対等に議論することができたという経験は何にも代えられない。今後も続けて実施して頂きたいし、ゼミ生も必ず参加すべきだと感じた。
4. 私は、大学生がこのような形で実務の方と触れ合える機会があることに非常に大きな意義を感じている。それは執筆者の考えが机上の空論に終わらせないようにすることもあるが、何より実務の方との議論を通じて、お互いにさらに考えを深められると考えるからだ。そしてこれからは我々のような若い世代が積極的に意思決定の場に関わり、次の世代を引っ張っていく必要がある。そのためにこれからもこう言う機会を活用していきたいと思う。
5. 特になし
6. 今年は3年生という立場で政策提言ツアーに参加し、自分自身が必死に取り組んだ研究成果を発表しましたが、どの職員の方々も真剣に評価・コメントをしてくださり、論文大会で賞を取ったとき以上に充実した嬉しい経験となりました。来年度以降もぜひ存続してほしいイベントです。赤井先生、学生のためにこのような機会を設けていただき、本当にありがとうございます。今後とも、ぜひ宜しくお願い致します。
7. 前年度の政策提言ツアーの際にも感じましたが、通常業務中にもかかわらずお時間を割いて発表に対し意見を頂き議論を交わすことが出来るのは非常に貴重な機会であると何度も感じました。この機会を設けていただいた赤井先生並びに先方の皆様に厚く感謝いたします。財務省での昼食では少々フランクな雰囲気でお話しいただけたりしたので、時間が許せばそのような場がもう少しあるとより有意義かなと感じました。

8. 大会に向けて書いてきた論文をもとに、政策に関わっておられる方々と議論できるというのは非常に貴重な経験であると実感しています。だからこそ、私たちの提言対象である市町村の方とも議論を繰り広げてみたいと思いました。
9. 一学生が執筆した論文を国や地方の専門家の方に発表して意見をもらうということは本当に貴重な機会であり、普通ではまずありえないことだと思う。そして財務省の方に提言した時はわざわざプレゼン資料まで作って説明をしてくださり、頭が下がる思いでいっぱいであった。ただ、せっかくの機会なので職員の方との意見交換ではもっと学生から積極的に意見を出した方がいいと思った。
10. 政策のプロに実際にプレゼンを行うことで、プロの視点を学び自分に足りなかったものを補えること、彼らの仕事のスタンスと実情を学び、ひいては日本が今何をやっているのか見ることができる、という2つのいい点があり、非常に魅力的である。1つ提案として、ある議題について担当部署とゼミ生全員で議論してみたい。もちろん、我々ゼミ生は事前に勉強会などを開催し知識を入れて臨むこと。
11. 今回のツアーに参加して、論文執筆の新たなインセンティブを得ることができた。大会でたくさんの人に論文発表を聞いていただくのも非常に有意義な時間だったが、何のために政策提言の論文を書いているのか、この論文はどういったところに役立つことができるのかということに対する答えを見つけることができた非常にいい機会だった。また、ぼんやりと抱いていたイメージ通り、職員の方も理解していても、制度や法律の関係上、問題解決が難しいというジレンマとも戦っていらっしゃるのかなとも感じた。こういった貴重な機会は今後も逃さず積極的に参加していきたい。
12. 単に机上で政策を考えるだけではその政策が実際に有効なのか、現場的には実現できるのかを深く考えず終わってしまうと思う。このような場があることで、もう一度自分たちの論文を客観的に見直すことが出来たのでとても有意義だった。

5. 政策提言ツアー実施の効果：企画者のコメント

2013年度に政策提言論文の全国大会にゼミ論文をエントリーし、その成果を実際に霞ヶ関での政策担当者に見てもらいコメントをもらうという「政策提言ツアー」を開始して、今年2019年度で7年目となる。毎年、財務省をはじめ、政策に関わる担当の省庁のみなさまには、大変お忙しいところ、若い学生のチャレンジの応援という形で、お時間を作っていたいている。感謝したい。実際に政策を設計している担当者と意見交換が出来る機会があることは、論文執筆の大きなモチベーションにも、また、今後、社会・政策のあり方を考える上で、貴重な体験となる。この体験をした学生が、社会に出て、社会問題に直面したときに、民間部門であれ公的部門であれ、この経験が役に立つことがあると確信している。それでこ

そ、企画者および対応していただいた皆様への恩返しとなるのである。この企画の継続には、時間も苦勞も多いが、学生の成長があつてこそ、やりがいがある。継続は力なり。